視覚情報記号論レジメ 6

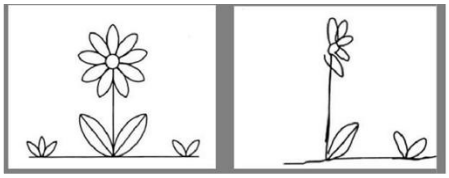
名古屋市立大学 2016 年度講義
久木田水生

1　視覚失認症

私たちは与えられた生の視覚データに対して様々な補完，解釈を行っている．そのような補完，解釈の機能が損なわれると，目や視神経には問題がなくても，見ているものが通常のようには認識されなくなることがある．これは視覚失認症と呼ばれる症状である．症状が深刻になると身の回りのあらゆるものについて，それが「何であるのか」が分からなくなる．例えば手袋を見てもそれが手袋であることが分からず，「これはもしかして小銭を入れておくものですか」と言ったりする．

視覚失認の中には認識できなくなるのが特定の対象に限られている場合がある．例えば空間の右または左の半分にあるものが意識されなくなる半側空間無視，書かれた言葉の意味が理解できなくなる失読，他人の顔が認識できなくなる相貌失認などである．

これらの症状は独立に現れる場合もあるし，複数のものが組み合わさって現れる場合もある．またその原因もさまざまであるが，脳の特定の部位の障害によって発症することが多い．例えば左半側空間無視の場合は右脳の損傷によって引き起こされる．これは体の左側の情報が右脳によって処理されるためである．半側空間無視の患者の多くは脳の右半球が損傷を受けることによって左側の空間が意識されなくなる．出された料理を皿の右側だけ食べ，顔の右半分だけ化粧を施し，花を模写させると右側にだけ花弁や葉っぱを描く（右図参照．画像は多摩川病院のウェブページより転載[1]）．興味深いのは二つの皿が左右に並べてあるとき，右側の皿の食べ物だけを食べるのではなく，右側の皿も右半分だけ食べることがあるということである．つまり右側の皿に注意を向けた時にはその皿の右側だけが意識されるようになるのである．また左半側空間無視の患者は時に自分の身体についても左側の半身をないもののように扱うことがある．



半側空間無視の患者による花の絵の模写

失読症の患者は個々の文字を認識することはできるが，しかし文字の連なりが持つ意味を理解することができなくなる．純粋失読症と呼ばれる症状の患者は文章を書くことは自然にできるのだが，しかし自分で書いたものが読めない．失読症に似たものとして，楽譜が読めなくなるという症状もある．

相貌失認においては，目や口などの個々のパーツは見えていても全体としての顔を認識することができず，人を見分けることができなくなる．また人の表情を読み取ることも不可能になる場合もある．

[1] http://www.tamagawa-hosp.jp/wp2016/wp-content/themes/hospitaltheme/images/reha-qa07.jpg